大河と文明

おやさと研究所准教授
森　洋明　*Yomei MORI*

コンゴ共和国の首都ブラザビルには、流域面積がアフリカで一番大きく、世界でもアマゾン川に次いで２番目のコンゴ川が流れている。その水量は年間を通して一定している。赤道直下の熱帯雨林地帯を流れている上、雨季と乾季に分かれるサバナ気候地帯が赤道の南北に広がっており、季節の違いによって降水量が相補関係になっているからだ。コンゴ川の対岸はキンシャサで、コンゴ民主共和国の首都である。高速フェリーに乗れば、約 15 ～ 20 分で到着できる。川幅は４キロだが、狭いところでは２キロになり、ローマ市内にあるバチカン市国を除けば、この二つの首都は世界で最も接近していると言えよう。

ブラザビルから見た対岸のキンシャサ

悠然とした流れである街の中心部とは異なり、支流の一つであるジュエ川が合流する街の南端では川の様相がまったく変わる。そこは激流となって大きな音を立てている。同じ川とは思えない。大きな岩が点在し、中州があり、さらにそこから川幅も狭くなっているので流れが急に激しくなる。あちらこちらで水しぶきも上がっている。この辺は「カタラクト（cataracte：大滝、激しい落下）」と呼ばれ、観光の名所だ。『コンゴ紀行』を書いたアンドレ・ジッドも、ブラザビルからコンゴ川を遡る船旅に出かける前に、数度このカタラクトを訪れている。ブラザビルから下流の 350 キロにわたっては、高低差の激しい地域が続き、急流となっているところが多く船の航行は不可能である。つまり、コンゴ川を通って海から直接船で大陸奥地へ入ってくることができない。

首都の付近では、コンゴ川が二つのコンゴを分けているように感じられるが、下流 100 キロあたりからはコンゴ民主共和国内を流れる。また上流の方は、ウバンギ川の支流が合流するところからは東に曲がり、コンゴ民主共和国北東部における交易の中心地であるキサンガニにつながっている。上流は下流と違って川幅も広く、人や物を運ぶ大型定期便が航行している。

文明の発展には大河がつきものだが、アフリカ大陸でもナイル川流域におけるエジプト文明と同様、大河の流域地帯に王国が形成され文明ができてきた。例えば、アフリカで３番目の長さをほこる西アフリカのニジェール川では、ガーナ王国やマリ王国、ソンガイ王国が興隆してきた。なかでもトンブクトゥと呼ばれる街は、14 ～ 16 世紀にイスラム商人による塩と金などの交易によって栄えた。最盛期にはイスラムの文化が花開き、その面影が現在でも残っている。この街の繁栄は「黄金の街」という伝説となり、地中海を越えてヨーロッパにも伝わった。19 世紀初頭、フランスの探検家ルネ・カイエは、この幻の街を目指してニジェール川を航行した。

アフリカ大陸南東部を流れるザンベジ川とリンポポ川に挟まれた地域では、「グレートジンバブエ」と呼ばれるアフリカで最も大きい石像の遺跡が残っている。現在も国の名前になっている「ジンバブエ」という言葉は、その地方で話されているショナ語の「石の家」という意味らしい。最も栄えたのは 14 世紀～ 15 世紀。モノモタパ王国やトルワ王国が、両大河を通じた交易によって繁栄をみた。

一方、コンゴ川流域から大西洋に面する地域では、川の名前にもなっているコンゴ王国が存在した。王国は 14 ～ 19 世紀まで続いたとされるが、その最盛期は奴隷交易が始まる頃の 15 世紀だった。世界的に大航海時代が幕開けた頃である。ポルトガルとスペインがイギリスやフランスに先立ち、大洋に進出した。そのなかで 1482 年、コンゴ王国はポルトガル人によって「発見」され、世界史のなかにデビューする。当時の王国はすでに社会として制度が整っていたようで、当初はポルトガルと対等な関係が結ばれている。とくに国王自身がキリスト教を積極的に取り入れ、子どももポルトガルに留学し西欧の制度や技術を学び、王国の統治に導入していった。

今日のブラザビルにかつてのコンゴ王国の痕跡は残っていない。そもそもコンゴ王国の中心はコンゴ民主共和国内のンバンザ・コンゴ（M’banza-Kongo）というところだった。首都キンシャサから約 250 キロ離れた南西に位置する。国王がカトリックに改宗したときには、サン・サルバドール（São Salvador）と街の名前が改められた。ヨーロッパ諸国がアフリカ大陸から黒人を「輸出」する奴隷交易が本格化する以前のことである。そのような時代に、ヨーロッパの列強とアフリカの一王国が「対等」な関係にあったというのは大変興味深い。

ところで現在、カタラクト付近には大した観光施設はないが、「ラピッド」（rapide：形容詞で「早い」、複数表記では名詞となり「急流」の意）という名のバーレストランがある。店の名前に反してサービスはすこぶる遅く、場合によっては調理が簡単そうな一品を注文しても１時間以上も待たされることがある。とくに客が大勢いるからというわけでもなさそうだ。ただ、そこからは激流の様子を間近で見ることができる。その様子はかつてジッドが見たものと変わりないのではないだろうか。アフリカの自然を肌で感じることができる。また、轟音をたてて流れる水の横で洗濯に精を出す人や釣りをする人、あるいは川岸で車体の半分以上を水につけて洗車をする人などを眺めていると、自然とともに生きていることが感じられる。

カタラクト付近で洗濯する人たち

ときには、激流のなかに人の姿が見え隠れすることがある。激しい流れに飛び込み、大自然の急流滑りに興じる子どもたちである。もちろん、一つ間違えば命にかかわる危険な遊びだ。事実、激流に飲み込まれたという事故は多い。ただそれでも、激しい流れにひるむことなく飛び込んでいく子どもたちの様子に、一種のたくましさを感じてしまう。そしてそのたくましさは、さまざまな苦難の歴史が繰り返されたなか、時代に翻弄され、その流れに浮き沈みしつつも、たくましく生き抜いてきたアフリカ人の姿と重なって見えてくる。

［参考文献］
川田順造編『アフリカ史』山川出版、2009 年。
宮本正興他編『新書アフリカ史』講談社文庫、1997 年。